



# 埼玉県指定史跡「別府城跡」

昭和16年3月31日 指定  
(1941)

「別府城跡」は、平安時代末期から室町時代における別府氏の居館跡であり、東西約100メートル、南北約90メートルの屋敷地が残されている。土塁と堀の保存状態も良好で、その規模は、堀が幅約5メートル、深さ約2.3メートル、土塁は高さ約2メートルである。城跡の敷地面積は約36,000 m<sup>2</sup>である。

別府城跡に建立された東別府神社は、創建年代不詳であるが、別府氏（藤原氏）の氏神として大和奈良の春日神社を勧請、天正18年（1590）の落城まで、城の鎮守だったと伝わる。明治42年（1909）に埋鳥の村社榛名神社を合祀、東別府神社と改称したとされる。

別府という地名の由来については、平安時代末期頃に「別官符」<sup>べつかんぶ</sup>（追加開墾状）によって開墾されたという説のほか、国府の支庁である別府が置かれたことによるとも考えられている。熊谷市と深谷市との境界周辺に所在する国指定史跡「幡羅官衙遺跡群」<sup>はらかんがいせきぐん</sup>では、7世紀後半から11世紀前半までの「郡家」<sup>ぐうけ</sup>（郡役所跡）が確認されている。これらの説からも、別府の地は古くから開発された所であることが推定される。

別府氏については諸説あるものの、『成田氏系図』によると、平安時代末期、成田氏の成田助高<sup>すけたか</sup>の次男である行隆<sup>ゆきたか</sup>が別府の地を支配し別府氏を名乗ったのが始まりとされている。行隆の長男である義行<sup>よしゆき</sup>が別府の東部に居住し、「東別府氏」となり、次男の行助<sup>ゆきすけ</sup>が別府の西部に館を構え「西別府氏」となったという伝承がある。別府の歴史を今に伝える「別府城跡」は、地元の人々の信仰と尽力によって貴重な文化遺産として現在に継承されている。

令和3年3月 熊谷市教育委員会  
(2021)

(解説：熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹)